

かかりすぎるといのが最大の問題点であろう。一般的にオンラインジャーナルの価格が高いというのも問題点にあげられるであろう。導入後の問題点としては、ユーザーインターフェース（使いやすさ）—たとえば必要な部分だけを印刷したいとかがわかりにくい点であるし、e-page（オンラインでないと見れないページがある）も問題点としてあげられた。

## 2. MD Consult について

導入のきっかけは雑誌費削減のため、冊子体の替わりとして使うということであったが、やはり冊子体のようにページをパラパラめくって読みたい記事を探すブラウジングがしたいと思ってしまうが、オンラインジャーナルではそれができない。記事を検索するにしても、利用者の能力に左右され、慣れない者には使いこなせない場合がある。できれば検索はPubMedのように使えると便利である。

## 3. IT Station について

電子ジャーナルの管理システムであるが、ID やパスワードが無くても利用できるので便利だと紹介をうけた。

## 4. コンソーシアム（共同購入）について

雑誌価格の高騰に伴い、コンソーシアムはどうかという意見がでた。現在、出版社別のコンソーシアムは多くあるらしいが、加入したとしても該当する出版社の雑誌をたくさん所蔵しているところはメリットがあるが、そうでないところは雑誌内容が画一化してしまうという問題がある。

（文責：渡辺 貴代子／京都桂病院）

# グループ5 仮想患者図書館

インフォームド・コンセントの実践を日常化したことにより、患者図書館サービスのあり方が変化しつつある。入院患者への娯楽としての一般書のみならず、心のケアや医学・医療に関する図書へのニーズが増える傾向にあり、これらのニーズに応えるためには新たなサービス機能を構築していく必要があろう。

しかしながら、患者図書館サービスをボランティアもしくは公立図書館主体で行うならば実施しても良い、という姿勢の病院が少なくないのが現状である。患者図書館そのものが生産性と直接関わりの希薄な部署であることから、十分な資金投入がされにくいのであろうと思われるが、ボランティアや公立図書館に全面的に頼りきったサービスで、本当に利用者のニーズに答えるのであろうか。適切な医学・医療情報を利用者に提供できるようにするためには、医学・医療関係の図書については、各専門科の医療従事者の協力を得て選定するのが望ましいと考えられる。各専門科の医療従事者が、利用者にとってわかりやすい図書の選定を平均的に行うということは、多岐にわたる医学・医療分野の図書を取りそろえることが可能となり、利用者の求める医学・医療情報をより多く提供できることに繋がると言えよう。

また、医療従事者用図書館と患者用図書館を別々に設けている病院も多い。医療従事者側としては、医学書を公開して患者に提供することに抵抗を感じる、そして患者側としては、自分の主治医にどのような本を読んでいるかを知られることに抵抗を感じる、という双方の理由から共有スペースを避ける傾向にある。しかし、インフォームド・コンセントとは医療従事者が患者に診療の目的および内容を十分に説明し、理解を得た上で治療を行うことである。既にアメリカでは、図書館を統一することによって、医療従事者と患者が同じ情報を共有することが可能となり、図書館は両者のコ

コミュニケーションが図れる場として活用されている。

さらに、患者図書館サービスでよく問題として取り上げられるのが感染問題である。現在は本を媒体とした感染例は無いとされているが、この感染問題を注視するあまり、利用者差別に抵触しかねない状況を生み出している。

そもそも、図書館そしてわれわれ図書館司書の役割は「本」という形あるものを提供することではあるまい。利用者が求めているのは「情報」であり、われわれに求められていることは、それをいかに迅速かつ的確に提供できるかである。これからの病院図書館は、病院が主体となって、医療従事者と患者との「情報」共有の場を構築してゆくことに重点を置くべきであろう。

タイトルは「バーチャル」であり「リアル」ではないが、一人の病院図書館司書として、上記で述べたことが「リアル」となるよう邁進したいと思う。 (文責：青木 ゆき／八尾市立病院)